

口絵 2：東京地学協会第12回海外巡検「トルコ大地震跡と古代都市遺跡めぐり」
Pictorial 2：Geological and Archeological Field Trip to Turkey in March 2009

トルコはボスボラス海峡を挟み、ヨーロッパとアジア大陸にまたがった国である。複雑な地質構成をもち、多くの遺跡・遺産があり、地質的にも文明の歴史の上からも重要な国である。本口絵は東京地学協会主催の海外巡検の際、訪れた地学的重要な地点、歴史的遺跡などを紹介する。詳細は報告 (p.726-731) 参照。



図 1 アナトリア文明博物館の展示。
アナトリアから出土した遺物を展示している。動物を象ったものが多く、美しい形に惹かれる。



図 2 カップドキアの侵食地形と穴居住宅。
第三紀の凝灰岩が侵食されて、奇妙な地形を造っている。この地層を利用して住居としたもの。



図 3 カップドキアの洞穴住居跡。
さまざまな生活の跡が保存されていて、面白い、かなり大きな空間である。



図 4 サルタン山脈の山 (アクセヒールより)。
谷と山の形が氷河地形を疑わせる。



図 5 トラバーチンの採石場 (コジャバス)。
地質時代は第四紀。碎石会社はテムメール社。チェーンソーで3mの大きさに切っている。



図 6 パムッカレ石灰棚。
構造線にそって湧き出す温泉水が地表に出て炭酸カルシウムを沈殿させている。



図 7 エフェソス遺跡。
アルミテス神殿など、いろいろな建造物の
遺跡。大理石に刻まれた各種の彫刻が美し
い。



図 8 緑色岩 (中生代) の露頭を見る。
チャナツカレの南。成因から考えればオフイ
オライトであろう。



図 9 トロイの遺跡。
円形劇場と横たわる石柱。9層にわたる都市
遺跡が見られ、その変遷が興味深い。



図 10 第三紀の泥質層の露頭 (チャナツカレの
南)。
白っぽいところがより石灰質である。海生
貝類化石を含み、破片が散らばっている。



図 11 ギョルジュクの海岸のトルコ大地震
(1999) の跡。
地上にあった街灯などが沈水している。そ
のまま残されている。



図 12 クラール (ギョルジュクの東) で見られる
横ずれ断層。
堤防が壊され、折れ曲がり、ずれている (写
真中央部)。

(写真・解説 : 糸魚川淳二)
(Photographs & Explanation: Junji ITOIGAWA)